

終える命、

つなぐいのち

國森
康弘

第17回 墓場に持ってゆくつもりだった……

※本連載は、本文のみ無料でお読みいただけます。
写真は、冊子版でのみご覧いただけます。

上から

▶沖縄戦の集団自決。
八重子さんは首に巻いた布が切れて、木から落下し、生き延びた。

▶初子さんと千代さんは、自決用に手りゅう弾を日本兵から渡された。とっさに頭を砂に埋め、爆発から逃れたが、家族7人が爆死した。

▶米兵に捕まるまい、と育江さん以外の家族親族25人全員が手りゅう弾や首つりで自殺した。



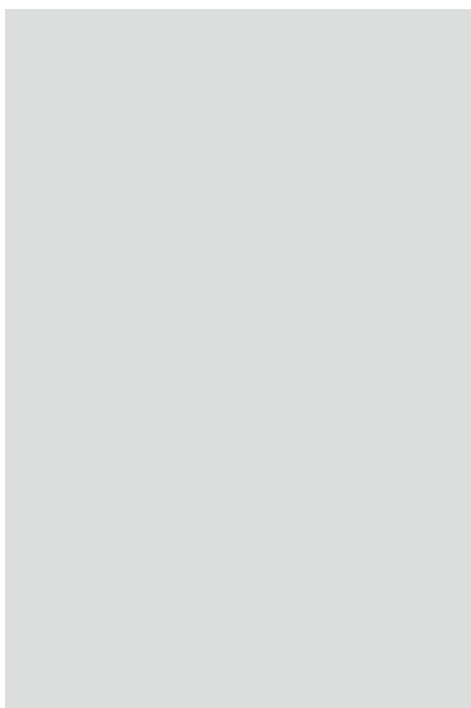
戦争が命の
バトンリレーを
断ち切った

人

の心は弱くて、もちろん、残虐でさえある。たとえば、ナチスによるホロコーストの心理メカニズムを知るため、1961年に米国イエール大学で行なわれた希少な心理実験がある。真の実験意図を知らない学生ら40人が「教師」役となり、意図を知り本当は演技している役者が「生徒」役に。「生徒」が問題を間違えるたび、「教師」が電気ショックを与える。電圧は15ボルトずつ上昇させていく。「教師」は前もって45ボルトの痛みを、実際に体験済み。強制ではなく止められるのだが、白衣を着た「博士」役が「教師」に冷徹に続行の指示、命令を出す。

300ボルトを超えると、泣き叫んでいた「生徒」は弱り果て、声も出なくなる。「教師」には最大電圧450ボルトでは死に至る可能性があると説明されていた。結果は生徒役40人の学生全員が300ボルト以上を与え、その65%にあたる26人が致死量の450ボルトまで上げた。中卒者や博士号取得者ら、「教師」役の被験対象を変えた数々の実験でも、結果は同様だった。平時には奥底に潜んでいる、心の弱さや権威への服従心、弱者への残虐性が、環境や立場によって前面にせり出してくるのだ。

ただ、実験結果を見るまでもなく、戦争体験者はそ



れを身をもって知る。筆者は戦場の最前線に立たされた100人近くに話を聞いた。中国戦線で上官の命令により中国人捕虜の首を斬り落とした弘康さん。ソ連軍の満州侵攻による敗走の際に、動けない日本人傷病者に致死量の薬を注射した従軍看護婦ナツミさん。沖縄戦で、住民を盾に防空壕の奥に陣取った元兵士の義人さん。集落への討伐で、逃げ遅れた中国人女性を輪姦したハジメさん。

戦争になれば、昨日まで普通に接していた自分の親や子、友人やご近所さんが、突然殺人者になる。いや、自分自身が殺人者になる――。イラク戦争（当時のブッシュ大統領が開戦の根拠は間違っていたと後に認めた）を真っ先に支持し自衛隊を派遣した小泉政権や、専守防衛を超えて集団的自衛権などで武力行使拡大を進める安倍政権をみて、大戦に突き進んだ時代と同じ「きな臭さ」を感じる、と証言者の多くが言う。

「死ぬ前に言わねばならない。戦争をしたがる支配者層は戦場には行かず、犠牲になるのは双方の国民。為政者や大金持ちが潤うために、殺し合いをさせられる。国境を超えて民同士でつながって、戦争を止めてほしい」。……遺言だ。

〈2007～08年撮影〉

くにもりやすひろ●写真家。イラク戦争を機に新聞社から独立し、紛争地や貧困地域などの現実を伝えてきた。2008年から日本の「在宅看取り」の現場を撮り始める。写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』シリーズ（農文協）ほか。